サービスラーニングで得たもの

社会福祉学部社会福祉学科２年　木下　雄太
活動先：社会福祉法人　むそう
ゼミ：村上　徹也　先生

１、サービスラーニングを通しての自分の成長と気づき

私はサービスラーニングで障害者の生活支援や就労支援を行っている「社会福祉法人むそう」にて六日間の活動を行った。活動内容は、毎年、参加している半田市内の地区のお祭りでの企画から当日のお手伝いだった。私たちは活動の初日にお祭りを行うことの意義を考える会議に職員さんに交じって参加させていただいた。その中で地域交流という言葉が出てきた。このように何かを企画する際にはまず意義を考えることが重要だということが分かった。この意義を考えたからこそお祭りはうまく進行できたのだろう。

お祭り前の活動は、主にお祭り当日の看板作りなどの作業が中心だったが、その中でも利用者さんもわかりやすいように、また、お祭りに来てくれた地域の人たちにむそうのことを知ってもらえるように工夫をして看板づくりを行った。文字だけでなくわかりやすいイラストを描くなどのちょっとした工夫をすることで相手がわかりやすく感じるということを学んだ。誰にでも理解することができるものを作るということの大切さがわかった。

活動五、六日目の午前にはお祭りとは関係ないが、むそうが就労支援サービスに参加した。むそうはラーメン屋、喫茶店、養鶏場、キノコ栽培などの職場を運営していて、そこで利用者さんがスタッフとして働き給与を得ることで社会勉強をする機会を提供している。職員さんは利用者さんが働きやすいようにアドバイスや手助けをするが、時には厳しく注意することもあった。「厳しく注意するのには社会に出て働いた際に障害があるから怠けてもいいという訳ではないから、怠けていると感じたら厳しく注意しないといけない」と職員さんはおっしゃっていた。障害があるからできないことがあるのは仕方ないが、怠けるのは違うということを教えていたのだ。「利用者主体」という言葉があるが、これは利用者のやりたいようにやるという訳ではないということを改めて再確認することができた。

また、その就労支援に参加してみて、利用者さんとのコミュニケーションの取り方が以前よりよくなったと感じる。以前は利用者さんと何かコミュニケーションをとらないといけないと考えるあまり、話すことが苦手な利用者さんにも強引に話しかけてしまうことも多々あった。よく話す利用者さんならそれでもいいのかもしれないが、あまり話さない利用者さんはそのような対応だと、びっくりしたり、混乱してしまうことがあると注意された。ただ目を合わせたり、相槌を打つだけでもいいということを学び、言葉を使って会話をすることだけが、「コミュニケーション」ではないということを理解した。

お祭りでは、利用者さんをただお祭りの会場に連れてきて遊んでもらうのではなく、スタッフの一員として職員さん、学生、ボランティアの方々と連携して、運営をする側にま

わることで、そのお祭りに来てくれて、むそうの出店で買い物をしてくれる地域の人たちに、障害をもっていてもちゃんと働くことができるということを知ってもらうこと、また、むそうの存在を理解してもらい、どのような活動をしているのかを知ってもらっていた。

また、お祭りの当日の会場や、毎日の就労支援の現場でも利用者さんが働きやすいように様々な工夫が施されていることに気付いた。たとえば、養鶏場ではトマトやナスのような農作物も作っているのだが、そこでは、利用者さんが水やりのホースが作物に引っかかって、作物がつぶれてしまうことを防ぐために、作物の周りに木製の柵が設けられている。これによりホースが柵に引っかかり作物を巻き込むことが無いようにされている。そのほかには、判断能力が低いという利用者さんのためには次にどのような作業をすればいいのかが一目でわかるような工夫をいたるところに施されていた。

２、活動を通して見えてきた地域課題や社会課題とその解決のための活動

私が参加した半田市の板山地区のお祭りではたくさんの高齢者の方が来てくれていた。板山地区は半田市内でも特に高齢化が進行しており、年々子どもが少なくなっている地域である。板山地区は半田市内では比較的障害者に対しての理解がある地域だと職員さんから聞いた。しかし、実際には、小、中学生の子どもたちの障害者差別ともとれる言動を見聞きすることも少なからずあった。障害者の理解ができているのは、高年齢層の人たちだけで、若い世代はまだあまり障害者への理解が進んでいないのではないかと思った。まだ、善悪の区別がつかず、中学生という多感な時期の子どもたちなので仕方のないことかもしれないが、私は、障害者のことを若いころから学ぶ機会があればこのようなことは減り、大人になっても障害者の方と交流する時があっても困ることが少なくなるのではないかと考えた。実際、むそうは近隣の小学校に利用者さんと職員さんが訪れ、障害者のことについて子どもたちが勉強できる機会を設けている。このような積み重ねが実れば、半田市はより障害を持っていても、持っていなくても暮らしやすい地域になっていくだろう。

３、自分自身の今後の課題、抱負

障害者を支援するにあたって、まだ自分のなかで何か迷いのようなものがあり、十分なコミュニケーションをとることができていないと活動を行ってみて気づいた。日常の会話やたわいもないことは話せるが、利用者さんが就労支援をしている際などに、果たしてこの利用者さんは本当にこの支援を望んでいるのだろうかと思っても、思い切りがつかず踏み込んだ話はまだできないと感じた。まだ、信頼関係が築けていない状況だったので仕方ないことかもしれないが、たとえ、長い付き合いになってもそのような会話ができるのか疑問である。そのため、相談技法などもこの先もっと実践して学んでいく必要があるだろう。また、ケアワークの技術も今後に向けて積極的に学んでいきたいと考えている。

自身の抱負としては、もしも将来自分が希望している福祉分野に進んだとしたら、今回経験した問題とは比べ物にならないほどの大きな課題に直面することがあるだろう。そこで、その課題を時間がかかってでも適切に対応することができるよう、ソーシャルワーカーとしての資質、技術、そして忍耐力をこの先、しっかりと身に着けていきたい。